

成立:昭和52年(1977)



叢書解題

江戸期から明治期にかけて刊行された鎌倉・江の島の案内記や地誌を、刊行された当時の装丁をそのまま再現することを主旨として覆刻したもの。昭和52年1月から12月までの期間に東京の村田書店から刊行された。各巻には巻次がないが、整理上これを補った。



構成及び各巻解題 [K08.4/1]

〔1〕『鎌倉旧蹟地誌』

本書は明治28年(1895)6月、富山房から発行された。書名は『鎌倉旧蹟地誌』となっているが、内容は必ずしも鎌倉地域には限定されず、藤沢・逗子・葉山・三崎・金沢等に及んでいる。本文は鎌倉の名称の由来、沿革略史に続いて各名所旧跡について記述している。また、小袋坂、無常堂塚、極楽寺坂等、随所に挿入されている挿画が興味深く、当時の姿を思い描く好材料となっている。編者山名留三郎については、出自、経歴等不明である。

〔2〕『鎌倉江島名所案内』『鎌倉江島金沢名所之枝折』『鎌倉名勝手引草』

『鎌倉江島名所案内』は明治15年5月に鎌倉で出版された。神社・仏寺・旧蹟・名勝の4項に分けて、神社2、仏寺10、旧蹟9、名勝3の24か所について簡略に記す。編輯兼出版人の相良国太郎は、経歴、生没年等不詳であるが、このあと明治30年代にかけて案内記・案内図数種を刊行している。

『鎌倉江島金沢名所之枝折』は藤沢で出版され、纂輯兼発行人は堀内立雄である。明治22年7月の初版以来、年毎に版を重ねて30年には第8版を数えた。堀内立雄については経歴、生没年等不詳である。内容は鎌倉、江島、金沢の3部で、鎌倉31項、江島4項、金沢4項、他に遊行寺、龍口寺の項から成る。挿絵は鎌倉に3図、江島、金沢に各1図。鎌倉の部に、「海浜院」「尋常師範学校」「御谷園」「扇ヶ谷温泉」の4項があるのが目新しい。鎌倉と江島の部には末尾に「旅館だより」として旅館名が列記されている。

『鎌倉名勝手引草』は明治30年5月、東京で発行、鎌倉で販売された案内記である。書名は表紙に『鎌倉江の島手引草』とあり、本文は『鎌倉名勝手

引草』である。内容の多くは鎌倉なので、本文表題の方がふさわしいと思われる。挿絵は八幡宮、建長寺、鎌倉宮、大仏、七里ヶ浜、江の島龍窟の6図である。編者兼発行人の霜鳥晴は、挿絵を描いた東濤舎巴凌の本名である。

〔3〕『現在の鎌倉』

本書は明治45年7月15日に発行された。7月30日が大正改元であるから、明治期最後の鎌倉案内書といえる。「主として鎌倉現在の発展程度を案内したる」と例言にあるように、いわゆる名所案内的ガイドブックとは趣を異にしている点が多々ある。例えば各字ごとの戸口、江ノ電や人力車の料金、貸家貸間等、当時の鎌倉の実情をあらわした記述が多いのが特徴である。附録の「別荘一覧」「営業一覧」は、別荘地として急激に消費地的性格を強めつつあった当時の町を知る上で貴重な資料となっている。著者の大橋良平及び発行所通友社についてはともに不詳である。

〔4〕『相州鎌倉郡小町村絵図』『相州鎌倉一覧図』

『相州鎌倉郡小町村絵図』は役所へ提出したものの控えと思われる。作図の年月は記載されていないが、村三役の署名の後に「神奈川県迄」云々と記されているのが手がかりとなる。神奈川県という呼称は明治元年の6月27日（一説には17日）に従来の神奈川県を改称したもので、これが同年9月22日に神奈川県と再改称されるまでの3か月間だけ用いられた。したがってこの絵図もその間に作られたものと推測される。簡略な絵図で、詳しいところまでは知りえないが、江戸末期の小町村を探る資料として貴重である。

『相州鎌倉一覧図』は明治11年に板行された木版の案内図で、版元は小町村の大坂屋孫八、彫師は横浜の横川豊治郎である。画工は不明である。江戸期には数多く刊行されていた鎌倉出版の案内絵図も明治になると急速に減少し、また木版刷の鎌倉絵図は明治15年ごろで姿を消し、次第に銅版画の絵図が台頭することになる。そうした意味からもこの一覧図は終末期に近い木版画の一つとして珍重に価するものといえる。

〔5〕『鎌倉比事（けんそうひじ）』

本書の著者は月尋堂となっており、公事物、裁判物と呼ばれる部類に属する浮世草子である。享保3年（1718）京都・中川茂兵衛板行の6巻本を底本としている。ただ原本の破損が著しく、原文も読みにくいので、叢書の刊行主旨とは異なるが、活字組み・洋装本として出版された。内容的には、単純で日常的なものが多く、その裁断も常識的であるが、鎌倉を題名としており、これまで全容が翻刻されることがないのであえてこの文庫に加えたという。著者の月尋堂は京都の人であるが、その出自、生没年とも不明である。

〔6〕『鎌倉江ノ嶋大山新板往来双六』

柳亭種彦の撰、前北斎為一の画によるものである。刊行年は不明であるが、北斎が為一と改名した年代から推測して天保4年（1833）頃と考えられる。道中双六の一種であるが江戸庶民の年中行事の一つともいふべき大山石尊詣りの道筋を扱っているところが目新しい趣向として迎えられたと思われる。